評論 展望

帰納的アプローチと演繹的アプローチの統合

アンデス考古学からの視点

文 関（せき） 雄二（ゆうじ）

権力への関心

ここ10年ほど筆者が関心を寄せているテーマは権力である。人が他人に強制する力を一般に権力と呼ぶが、筆者が興味を抱くのは、個人レベルというよりもむしろ社会の構成員が認めるような社会的な権力の存在がいつ、どのように誕生し、変化していったのかという点である。本稿では、筆者がこの研究テーマにたどり着くまでの過程を示しながら、日本や米国の研究動向に触れ、併せて現在進める研究プロジェクトの構造について紹介してみたい。

筆者は、大学院時代を含めて36年間、アンデス文明が成立した南米の山中において巨大な祭祀建造物を発掘してきた。東京大学の石田英一郎と泉靖一が率いて1958年に発足した日本のアンデス考古学調査の流れを引き継ぎ、分野横断的な研究組織を立ち上げ、共同研究の形態をとりながら研究を進めている。55年以上に及ぶ調査団の歴史では終始一貫して文明の形成過程を追究し、ことに定住化とほぼ同時に巨大祭祀建造物

現在手がけているペルー北高地パコパンパ遺跡（2010年、関雄二撮影、パコパンパ考古学調査団提供）。

ペルー中部高地コトシュ遺跡「交差した手の神殿」の発掘（1963年、東京大学アンデス調査団提供）。

が出現する形成期（前3000年～西暦紀元前後）と呼ばれる時代に光をあててきた。筆者の研究もこの流れに位置づけられる。

こうした古代文明の形成過程の研究は、国内外を問わず、考古学的手法を用い、おもに文化人類学の枠内で推進されてきた歴史がある。古典的な進化主義を経て、20世紀の半ばからは多系的な進化を認めながらも、部族から首長国、そして国家へという発展図式を根幹に据えた新進化主義的アプローチが隆盛をきわめた。その後、この見方は個々の文化の脈絡を重視する研究の前に衰退し、一時、文明研究は文化人類学としては停滞する。しかし、現在では手法も精緻化され、地域的多様性を押さえた上で文明形成に迫ろうとする研究が、おもに米国の考古学者の手で行われつつある。

米国における考古学

米国の場合、日本と違って考古学が文化人類学と同じ学科や教室に属することが多いため、考古学は文化人類学の研究動向にもともと敏感であった。異文化研究として、同じアメリカ大陸で暮らす同時代の先住民を研究することから始まった文化人類学が、先住民の祖先の手で築かれたマウンド（土盛り）を調査する考古学と同居することは何ら不思議ではなかったのである。

そのため米国では、出土遺物の記載や分類、そしてそれらの比較から系統関係を追うような古典的な考古学よりも、もう少し抽象的なテーマを前面に出した研究が目につく。近年であれば、戦争、饗宴、景観そして権力も人気のあるテーマである。テーマを先行させると、おのずと研究方法は演繹的になりがちである。そのためデータが乏しいにもかかわらず、結構大胆な論を展開することもたびたびあり、机上の空論だとか、初めから結論ありきではないかという批判もよく耳にする。

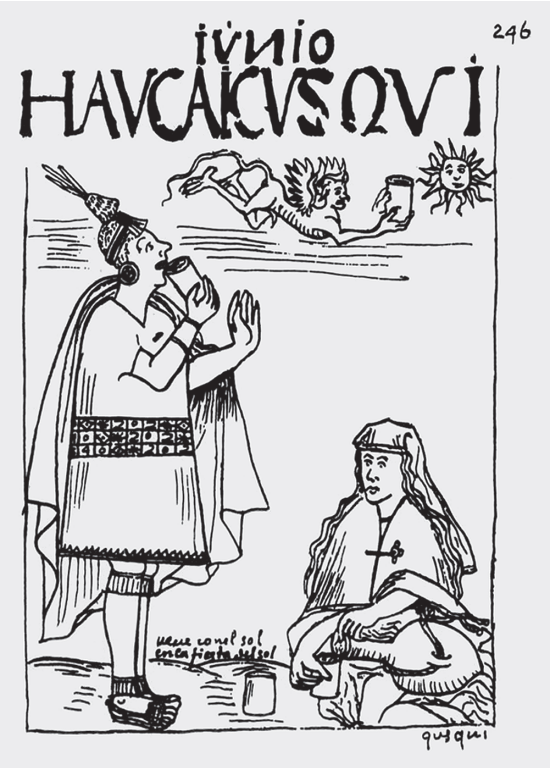
アメリカ考古学の一翼を担うアンデス考古学でも、こうした演繹的手法が幅をきかせてきた。たとえばアンデス文明の最後に登場したインカ帝国をひとつの完成モデルとして位置づけ、そこから過去にさかのぼるという手法がある。周知のようにアンデス文明では、数を数えるシステム（キープ）を除けば文字は存在しなかった。しかし、16世紀の前半、スペイン人によってインカ帝国が征服された後、筆記文字が導入され、征服者、植民者、そして読み書きを覚えた先住民やその両者の混血であるメスティソがこぞってインカ時代、あるいはそれ以前の社会の様相を書き残した。なかには徴税のために記された地方事情報告書の類いもあった。これらを一般にクロニカ（記録文書）と呼ぶ。じつは、インカ帝国については、考古学よりもこれらクロニカに依拠する歴史研究によって明らかにされてきた部分が大きい。インカの政治、経済、宗教など一般に語られるものの多くは、歴史研究の成果なのである。

確かに歴史研究から得られたインカ帝国の情報は、インカ以前の古代文化を遙かに凌ぐ量と質を誇る。しかもインカはアンデス文明の最後にほぼアンデス全域を支配下に収めた政体であることから、アンデス文明の集大成であるとも言われてきた。じつはこの見方こそ、考古学者の演繹的アプローチを加速させているといえる。すなわち集大成ならば、逆にインカ以前の文化にはインカが抱えていたシステムの一部なり、文化要素の前駆体が残っているはずだと考えることはしごく当然だからだ。

ホープウェル文化（前200～後500年）の巨大な埋葬用のマウンド（撮影年不明、オハイオ州、Jeffrey Quilter提供）。

たとえば、インカでは王と被支配者間の互酬的な関係が認められ、またトウモロコシ酒をこの関係を維持するために用いてきたことを歴史研究は提示してきた。これに目をつけた考古学者は、インカに見られる制度や習慣がいつの時代から、どこで、どのように登場したのかに関心を向けることになる。

しかし、よく考えてみると、こうした手法はアンデス文明がその誕生からインカに至るまでいわば右肩上がりに変化を続けてきたという単純な社会進化論を暗黙の前提としているような気がしてならない。いったん出現した要素は後々まで生き残りつつ、より複雑なシステムに吸収されていくというイメージであろうか。このため首尾一貫して存続する要素やその組み合わせを見いだすことにいそしみ、それを「アンデス的なるもの」と呼ぶ研究者は多い。先述した互酬的関係などは、古くからあったと考えられ、その一例としてよくとりあげられる。



17 世紀の記録者グァマン・ポマ・デ・アヤラが描いたトウモロコシ酒を飲むインカ王（Guamán Poma de Ayala, F., *El Primer Nueva Corónica y Buen Gobierno*, 3 vols., Edición crítica de J.V. Murra y R. Adorno, Siglo Veintiuno, México, 1980 [1615] より）。

筆者自身は「アンデス的なるもの」が存在するなどという単純な議論に与することには躊躇する。人間の日々の実践が生み出す産物や世界観は一定の均質性を保つ一方で、内的、あるいは外的要因によって常に変化に晒されている。そうした変化の中で、物質文化（考古遺物や遺構）に付与される意味やその使い方が数千年間も常に同じであり続けたという保証はどこにもないからだ。むしろ考古学者がまず追究すべきは、個別の脈絡の中で物質文化の意味を問い、厚く記述することであろう。これが可能になり他地域や他の時代と比較して初めて「アンデス的なるもの」の存在を問えると考えている。

日本調査団の研究傾向

その意味で、記載に重きを置くこれまでの日本調査団の研究手法は正攻法であり、米国のそれと比べても真逆と言えるほど帰納的であった。演繹的手法はとらず、ひたすら対象となる遺跡の発掘を長期間にわたって行い、出土する遺物を綿密に分析し、報告書を刊行してきたのである。では地道なデータの積み上げから、何か理論的なものが見えることはあるのだろうか。答えはイエスである。

これまでの日本のアンデス調査の成果は、欧文報告書はもとより、『文明の創造力』（加藤・関編 1998）に収斂されている。そこでは、文明初期に大規模な祭祀建造物が築かれたのは、何も余剰生産物の分配や消費など経済面で権力を握った人物なり社会階層が存在したわけではないことが考古学的に明らかにされた。このことは、従来の食糧基盤を重視する単純なマルクス主義的文明形成論が当てはまらないことを示している。経済面よりもむしろ祭祀面にエネルギーが投下され、しかもその方法は強制的というよりも社会成員のボランティアによるものであったというモデルを筆者らは提示したのである。

祭祀面へのエネルギー投下とは、儀礼よりも考古学的に検出しやすい神殿の建設やその更新活動を指す。このモデルを「神殿更新」説と名づけた。さらに、よくいわれるエリート階層を支える食糧にあてられる余剰生産物は巨大な祭祀建造物の建設の前提ではなく、むしろその逆で、祭祀建造物の改築や更新の産物であると位置づけた。この説には欧米の研究にはない斬新さがあり、近年、これを支持する研究者が出始めている。いずれにしても、「神殿更新」説にたどり着くまでには、筆者が研究を始めてから 10 年、調査団自体の発

足から数えると、じつに40年もの時間が経過していた。データをこつこつと積み上げる帰納的なアプローチでも抽象的な概念や理論に近づくことができる一例である。

こうして長い時間をかけて構築した「神殿更新」説であったが、祭祀にまつわる共同労働や社会構成員の自主的参加を重視した社会統合論に終始したため、権力者の出現など社会動態への視点に欠けていたことも事実である。結局、後の国家レベルの複雑社会の成立と、「神殿更新」説がどのように関係したのかを説明することができなかったのである。そこで筆者は10数年ほど前から、「神殿更新説」のバージョンアップに取り組むようになった。その過程で、帰納的なアプローチに限定せず、演繹的なアプローチも取り入れることにした。

ペルー北高地に位置するワカロマ遺跡の発掘。「神殿更新」説を支えるデータが得られた（1985年、東京大学アンデス調査団提供）。

演繹的手法との接合

確かに基礎データの蓄積は重要であり、いつどこでテーマが変わったとしてもデータが持つ輝きは失われない。しかし、そこから集まったデータだけから何かを読み取ろうとするには、いかんせん時間がかかる。また日本人はデータだけを提示しているとの欧米研究者からの批判もよく耳にする。そのためかいくら詳細な報告書を出版しても引用されない苦い経験をしたことも多い。これは単に発表に使用する言語だけの問題ではない。料理において、いくら新鮮かつ味のよい材料があっても、調理をし、味わってもらわないかぎり評価されることがないのと似ている。またデータの蓄積の重要さを知っているからこそ、慎重さをもって理論面に目を向けることができるはずだという判断も筆者にはあった。

しかし安易に手を付けたくなかったのが、「インカモデル」の適用であった。先述したような「アンデス的なるもの」の存在に対する疑義があり、インカ的な社会的特徴の起源を探すだけでは、せっかく蓄積したデータの存在意義が失われると感じたからである。そこでデータを活かしつつも、権力論や社会的差異の発生を捉える方法の模索を開始した。

まず注目したのは考古学以外の研究であった。権力論ならば社会科学の分野でこれまでも盛んに議論されてきたテーマである。その中でも、筆者が刺激を受けたのは、社会学者マイケル・マンの『ソーシャルパワー』（2002）であった。現代や歴史時代の社会ばかりでなく、古代文明も扱った壮大なスケールの著作である。

とはいえ筆者が興味を持ったのは、マンの結論ではなく（古代文明論の分析については資料が限定的で論が粗い）、むしろ権力の分析方法であった。これをこれまで日本調査団が蓄積してきた十分なデータに適用することができれば、各社会で不平等が生み出され、リーダーが権力を獲得する様相の解明という研究目的を達成することが可能になると考え、その考察を『権力の考古学』（関2006）にまとめたのである。

経済、戦争、そしてイデオロギー（マンはこれに加えて政治をあげるが、考古学的には同定が困難）という権力資源が相互に絡みあう様相を権力の様相として

とらえるアプローチは、分析対象となる社会間の比較を可能にするみごとな手法である。結果として「神殿更新」の他にも、奢侈品の流通をコントロールするという、権力の出現をもたらす別の道筋が存在し、そちらの方が「神殿更新」以上に社会的差異を生み出すことが明らかになった。

こうしたリーダーの権力に注目する研究方法は、エイジェンシー（行為主体性）論などアメリカ考古学や文化人類学でも近年注目されているが、アンデス文明初期を対象とし、しかも膨大なデータを駆使した研究は現在でもわずかである。

さらに筆者は、『権力の考古学』で示した見解を検証すべく、科学研究費補助金基盤研究（A）海外調査「先史アンデス社会における権力の生成過程の研究」（平成19～22年度）に基づき、ペルー北部高地において残された最大の形成期遺跡であるパコパンパの調査を、ペルー国立サン・マルコス大学と共同で実施した。ここでは川田順造が唱えてきた「文化の三角測量」という研究方法も組み込んだ。川田の場合は、地理的にも文化的にも異なる3つの社会間の比較することが多く、同じアンデス文明初期の社会内で比較することとはずいぶん違う。しかし、物理的な距離が近い場合でも「神殿更新」ばかりやっている社会と奢侈品の流通に依存している社会が並存していたのであるならば、アンデスで別のバリエーションが存在してもおかしくはない。したがって三角測量の意義はあるに違いないとやや強引な解釈をし、第3の事例として別の遺跡の調査に挑戦することにした。

社会的な差の誕生を示す特殊な墓の副葬品（ペルー北高地クントゥル・ワシ遺跡）。（1999年、義井豊撮影、クントゥル・ワシ調査団提供）。

データ解析は途上ながら、目下のところ金属器の生産や流通に主軸を置く第3の権力生成の道筋が存在した見通しが得られつつある。すなわち、個々の遺跡ごとに権力の生成過程が異なることになり、三角測量のアプローチの有効性を確信した。

こうした相違、すなわち多様性の存在を把握する一方で、大きな社会変化が同時期に起きているという共通性を抽出することもできた。この見通しは、次なる研究のレベルへ筆者を誘うことになった。どこまでこの多様性は広がっていくのか、また多様性と同時に認められる共通性とは、どのような要因で生じたのか。これらの問いについて、これまでの日本調査団の成果を含め、北部ペルーで蓄積されてきた形成期の遺構や出土遺物のデータを再検討する必要性を痛感することになったのである。

権力論を通して見た文明形成

ようやく現在取り組んでいる科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（平成23～27年度）にたどりついた。実際、ここまで研究上、多くの時間が費やされた。とはいえ、基盤研究（S）においては、一般に研究の集大成という位置づけが求められているだけに、長期にわたって熟成させてきた筆者の研究課題をまとめるには都合がよかった。本稿の最後に、この研究の構造について述べておきたい。

研究の構造化は必須である。ここでいう構造化とは、研究内容を含むことはもちろんだが、研究目的と研究手法の連関関係であり、それから導き出される結論への確かな行程表を指す。普通の論文でもそうだが、目的ばかりでなく、研究の方法やアプローチ、そして統合の道筋を明示することは当然であろう。ところがこ

れまでさまざまな助成金の審査に携わった経験からいわせてもらうならば、研究の構造化に成功しているプロジェクトは意外に少ない。筆者が自分のプロジェクトを遂行するにあたり工夫したのは3つの研究レベルの設定とその統合方法であった。これらのレベルを、ミクロ、メソ、マクロと名づけた。

ミクロ・レベルとは、前の科研プロジェクトから継続してきたペルー北高地に位置するパコパンパ祭祀遺跡の発掘調査を根幹に据え、遺構、出土遺物の分析を、考古学のみならず、自然人類学、地質学、保存科学など自然科学を含む分野横断的体制の下で進める研究である。考古資料を経済、軍事、イデオロギーのどの権力資源にかかわるものであるかを同定し、社会のリーダーがどのような資源の組み合わせで権力を操作しようとしたのかに注目するわけだ。

たとえばひとつの遺跡における石器の空間的分布を調べ、特定の集団に帰属していたかどうかを判断するばかりでなく、石材の原産地を科学的に同定し、搬入ルートや労働量の統御があったかを考えることもミクロ・レベルに含まれる。さらに人骨に蓄積されたコラーゲンを抽出し酸素・窒素同位体比を測定することで生前に摂取していた食糧を復元し、食糧へのアクセスに差が存在したかどうかを判断することなど、ミクロ・レベルでやるべき分析は山ほどある。

一遺跡で復元した成果は次のメソ・レベルにおいて比較の材料となる。パコパンパと同時期の他の祭祀遺跡のデータと比較するため、パコパンパ遺跡以外の北高地の遺跡を発掘するメンバーからデータを提供してもらい、同じ視点に立った分析をすることが重要になる。また北高地以外の形成期遺跡との比較を行うために、とくにこの分野で秀でた業績をあげてきた米国人研究者とのワークショップを国内外で開催し、アンデス文明初期の多様な社会状況を把握することに努めている。さらには、同じアンデス文明でも、形成期以降に現れる国家レベルの社会を研究する欧米の専門家との討議を行うことで、冒頭であげた「アンデス的なるもの」の存在について考察を行っている。この過程で再確認できたのは、「アンデス的なるもの」を簡単に語ることの危うさであった。

こうして得られたアンデス文明形成に関わるデータを、世界の他の文明の形成過程と比較するためシンポジウムを開催し、アンデス文明を相対化する作業も併せて行うこともプロジェクトには含まれている。これがマクロ・レベルとなる。ただし筆者の目論見は、トインビーやハンティントンが行ったような文明の分類にあるのではない。あくまでアンデス文明を相対化するために、権力という視座を確保した上での比較である。これまで、中米のマヤ、西アジア、エジプトとの比較を行ってきたが、予想以上におもしろい成果が得られている。

たとえば、西アジアでは、近年農耕定住以前の狩猟採集段階で巨大な祭祀建造物が築かれていることがわかってきた。余剰生産物の存在を前提に社会的差異を論じ、唯物史観の先頭を切ってきた西アジアからの報告は、アンデス文明だけが例外的な形成過程を経たとはいえないことを示している（関編 2015）。

今日、世界の考古学もかなり蛸壺化が進んでいる。研究の質が上がっていることは確かだが、専門分化された研究成果が他の地域を専門とする研究者の目に触れることが少なくなってきている。たしかに茫漠とした比較では意味がないが、テーマを設定した上での比較ならば、互いの研究を相対化することができ、解釈の選択肢も増える。

このように帰納的アプローチと演繹的アプローチのバランスをとりながら文明研究を拓く作業はじつにおもしろい。

【参考文献】

加藤泰建·関　雄二編　1998『文明の創造力──古代アンデスの神殿と社会』角川書店。

マン、マイケル　2002 『ソーシャルパワー──社会的な〈力〉の世界歴史 Ⅰ　先史からヨーロッパ文明の形成へ』森本醇・君塚直隆訳 NTT 出版。

関　雄二　2006 『古代アンデス　権力の考古学』京都大学学術出版会。

関　雄二編　2015『古代文明アンデスと西アジア　神殿と権力の生成』朝日新聞出版。

せき ゆうじ

国立民族学博物館民族社会研究部教授。専門はアンデス考古学、文化人類学。南米ペルーにおいて神殿遺跡の発掘調査を行い、アンデス文明の成立と変容の解明に取り組むかたわら、文化遺産の保存と活用についての調査と実践活動を手がける。著書として『アンデスの文化遺産を活かす』（臨川書店 2014 年）、『アンデスの考古学』（同成社 2010 年）、『古代アンデス　権力の考古学』（京都大学学術出版会 2006 年）などがある。